

## 汽車が通った（北陸本線一部開通）

### （一） 汽車見物

明治二十九年七月（今から百年ほど前）に北陸本線が一部開通し（敦賀～森田間）鯖江を初めて汽車が通りました。

それまでは、人や牛や馬の力で荷物を運んでいた時代だったので、人々は、

「人や荷物を乗せて走る鉄の車が出来たんにやつての。どんなんかの。」

「ほれも、蒸気で走るって言うがの。どうやって走るんかの。」

と、どこへ行ってもその話でもちぎり。一目見ようと大へんなさわぎになりました。

織田や池田の人達は、夜中に起きてちようちんで足元を照らしながら、ごちそうや敷物のむしろ



を背負い、お茶の入った竹筒を腰にぶら下げて、  
わらじを履き、山道を夜通し歩いて見物に來まし  
た。

近くの村や町の人たちも、朝早くから集まって  
鉄道わきの細い道はずっと見物人でいっぱいでした。  
人々は、むしろを敷き、持ってきたごちそうを  
食べながら、初めて見る汽車に期待をふくらませ  
ながら、

「今に來るか。今に來るか。」

と暑い中で首を長くして待っていると、日中も経  
つてようやく日野川の鉄橋を渡る汽車の汽笛が  
ポーツと聞こえて來ました。

「今の音は汽車やろ。」

「ほうや、ほうや 汽車が來るぞ。」

みんなは、かたずを飲んで汽車の來る方を一心  
に見据えました。

すると、目の前をまっ黒な大きな蒸気機関車に  
引かれた客車もくもくと煙を吐きながら、ガ



ツ、ガツ、シユツシユツ、ガツ、ガツ、シユツシユツ、ポーッと通り過ぎて行きました。

「あれが汽車か。はえー（速い）なあー。」

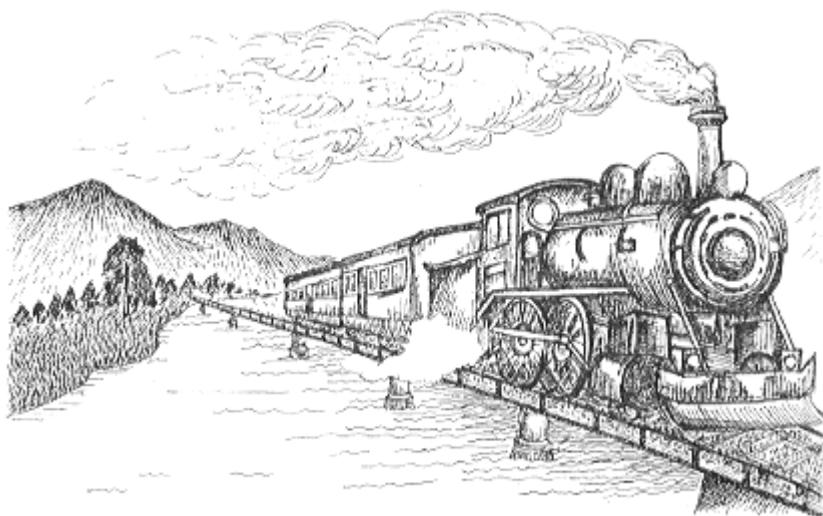
人々は初めて見た汽車に感動し、大いに満足して、持つて来た荷物をまた背負い、黙々歩いて家へ帰りました。

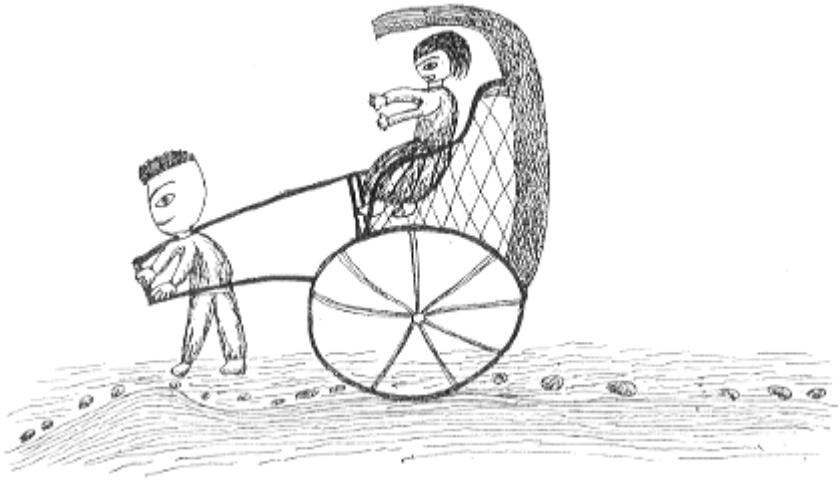
しかし、そんな汽車の乗れたのは極くわずかな金持ちの人達だけで、明治、大正時代の豊地区や吉川地区の人達は、京都まで歩いて商いに行つたということだ。

## (二) 鯖江の停車場まで

今は、車がたえまなく通るこの豊地区も、昭和二十五年まではバスもなく、汽車に乗る人は鯖江の停車場（今の鯖江駅）まで歩きました。

豊むかしむかし第一集「橋の上のゆづれい」でも分かるように、その頃は、ゆづれいの出た話や、





きつねにだまされた話がいつばい。夜道はとても  
こわかったそうです。

下野町に本家丹尾様と呼ばれた家のおじよ  
さん（お嬢さん）は、豊小學校を卒業すると、  
福井の女學校へ通いました。寒い時や、おそくな  
った時はお抱えの人力車で鯖江の停車場まで行き  
ました。人力車というのは、大きなほろのついた  
車で、座席は一人分しかなく、男の人が車を引  
いて走りました。

明治二十九年七月に北陸本線が一部開通し、明  
治三十年には鯖江の停車場の前で人力車が営業  
を開始し、駅前のお店屋さんは片手間に仕事をし  
たそうです。

鯖江の停車場の前には、この人力車がいつも五  
六台、汽車から降りて来るお客を待っていました。  
午後四時頃、鯖江に着いたおじよるさんは、雪  
の降る道を歩いて野田へ向かいました。冬の日は  
暮れやすく、当田の閻魔堂の所までくると、暗く

なつてしまいました。

トコ、トコ、トコと、後ろからついてくる足音がはたと止み、歩き出すと、また、トコ、トコ、トコと、ずつとついてきます。

おじよるさんは、怖くなって四屋家（昔は四軒しかなかったと言つ下野田町の出村）の黒田かねさんの家へ飛び込みました。

「なんか、後ろからついて来るでおどろしい。」

と言つと、かねさんは

「ああ、ほれはきつねめや。うら（わたし）が追っばらつてあげんすさけ（追い払つてあげますから）はよう、行きなはれんせ（早く行きなさい）じいが見てておあげせんす（見ていて上げます）。」

と言つて、シツ、シツと狐を追い払つてくれました。

また、丹尾家の庭には、天狗様が住んでいたと

言つ木がありました。

和田から鯖江市の停車場まで行くには、どうしてもその木下を通らなければならず、みんなに恐れられていましたが、今は、その木も無くなりました。

街灯（町の通りについているあかり）がつき、道が舗装されて車が走り、きつねも、天狗様も、住む所が無くなったのでしょうね。

